

図書室月報

2021年(令和3年)10月5日

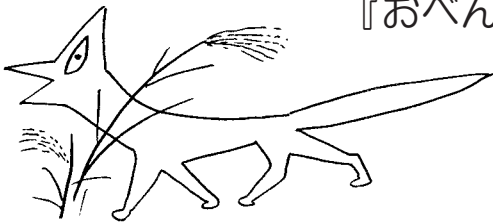
第701号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉



いつも家族のことばかり考えていた

『おべんとうの時間がきらいだった』を受講して



中村 知子

「お昼は学校の購買でパンを買いなさい」
父はそう言って、私と兄にお金を渡した。
小学生の頃、母が家を出ていったことがある。(結局、十日ほどで戻ってきたので、安心して読み進めてください)。

困ったのは私たちのお弁当だ。昭和一ケタ生まれの父には、自分が作るという発想がない。
パンを買うのは嫌ではなかった。大好きな「あんドーナツ」が食べられる。一日だけならよい。だが、これが毎日続くとすると、厄介だ。私の家庭で何かが起こっていることを、級友たちは察してしまいうだろう。

子どもというのは、時に大人な部分を併せ持つ。クラスメイトの家庭の不和を知ったとき、誰もそのことに直接は触れない。
そのことが、かえって当の本人をいたたまれない気持ちにさせる。

「弁当というものは、残酷だ。(中略)自分が背負っている家族を、小さな箱と向き合う度にいつも突きつけられる」

『おべんとうの時間がきらいだった』(岩波書店)
というエッセイ集の一節だ。著者は阿部直美さん。
阿部さんは、お弁当に苦い思いを抱いていた。
お父さんは大変な変わり者。独自のこだわりを持つあまり、些細なことで激怒する。娘の直美さんは、常にビクビクして過ごしていた。お母さんはいつも不機嫌で、お父さんへの不満でいっぱいになっていた。そんな家庭の食卓には、楽しいことなんて一つもない。

お弁当はふつう、前の晩の残り物が詰められるものだ。弁当箱の蓋を開けた瞬間、昨夜の淀んだ食卓が目の前に現れる。だから、お弁当は嫌いだ。
友達に知られたくない。誰にも見られたくない。阿部さんにとつて、お弁当とはそういうものだった。
息苦しい家族から逃れたくて、高校生のときに米国留学までした。

家族なんて煩わしい。うんざりだ。どうしてあの両親のもとに生まれたんだろう。

阿部さんは、両親を観察して日記に書きつけることで、気持ちを落ち着かせてきたそう。大人になつてそれを読み返してみると、重苦しい毎日が綴られているのに、なぜか最後に「お父さん、大好き」と書かれていることがしばしばあったという。本当は、ご両親のことを「好き」になりたかったのかもしれない。「好き」と思える要素を見つけるために、観察していたのかもしれない。

人生は異なるもの。夫で写真家の了さんさとしの発案で、普通の人のお弁当を取材することとなった。了さんの写真に直美さんが文章をつける。

蓋をすることで見つめずにお弁当に、ライフワークとして向き合うことになったのだ。

それが二十年近く続く。
そうしているうちに、お弁当と阿部さんご本人との境界線が少し滲んで、お弁当が、その向こう側の作るのが、一緒に食卓を囲む家族が、見えてきた。

阿部さんが見ていたのは、お弁当の中身ではなくて、人だ。そして、いつもどこかで、子どもの頃のご自身やご両親のことを重ね合わせていたという。

(次頁上段につづく)

『家族のことばかり考えていた』

はじめは、著書のタイトルのそうするつもりだったそうだ。

そう。阿部さんは、いつも家族のことばかり考えていた。

お弁当ブームになって、見栄えや、手作りであることが重視される風潮になった。そのことに居心地の悪さを感じたという。「お弁当に込められているのは愛」と、お弁当と愛情とが一括りにされることに、違和感を覚えたという。

「それって、本当だろうか」。お弁当に家族の現実を詰め込まれた阿部さんには、お弁当と愛とを単純に結びつけることができない。

その想いを伝えようと、本を書いた。すると、どうだろう。お弁当を軸に書き進めていくうちに、境界線がもつと滲んで、「家族の問題」が一つずつ解けてきた。

お弁当あつての、阿部さんだ。お弁当には、それを食べる人の日常が宿る。何も特別でなくてよい。みんな普通の毎日を、ひたむきに生きて、お弁当を食べて、いろいろな背景を背負っている。

お弁当とは、そういうものだ。



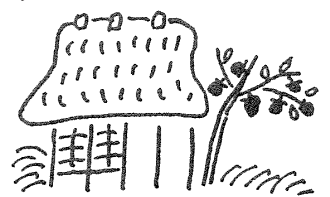
〈図書室のつどい 参加者の感想〉

「和歌と暮らした日本人」に参加して



日本人」に参加して

星野 友美子



和歌は私達の日常とは別世界ではない、とはどういうことなのだろうと、興味を持ち参加しました。

講師浅田徹さんは国立高校ご卒業。国立とはご縁がありました。在学中、国校野球部が甲子園出場という快挙があり、当時の楽しいエピソードで、お話が始まりました。ちなみに先生は合唱部です。最後に和歌を張りのある美しい声で詠んでくださいました。

四つの場面に分けられた十四首の歌を教えていただきました。その中から私の特に心に残った歌を書いてみます。・身を分くることの難さにます鏡影ばかりをぞ君に添へつる

遠国へ行く友に送る鏡に添えた歌です。自分の姿を鏡に映し、その鏡と共に一緒に行きたいと別れを惜みます。又当時の旅の大変さも感じられます。

・故郷は見し如もあらず斧の柄の朽ちし所ぞ恋しかりける
離れて初めてわかる、それまで居た場

所の心地よさ恋しさを詠った歌です。私もかつて住んでいた所を懐かしく思い、同じ気持ちになりとてもよく分かりました。

・白雲の上知る今日ぞ春雨の降るに甲斐ある身とは知りぬる
永い下積み生活から、雲の上の世界(宮中)に入ることが出来、報われたと詠った歌です。清々しい達成感が感じられ、心に残ります。

終りに紹介された百人一首は恋歌が多く、実生活の歌は多くなさそうです。和歌の前に書かれている詞書は、詠われていたその時の背景がわかる重要なものですが、百人一首は詞書が少ないのが残念と浅田さんは話されていました。

千年の時を過ぎても、寂しき、別れの辛さ、親の子を思う気持ち、宮仕えの大変さ等々現代の私たちにも共感できる歌ばかりでした。

浅田さんのお人柄あふれる楽しいお話と、大変分かりやすい解説で和歌がとて

くにたちブッククラブ

一人、野を越え山越えて一

古井由吉『辻』

(新潮文庫)

講師 大野 亮司 (亜細亜大学・日本近代文学)
とき 10月14日(木)夜7時半~9時半
ところ 公民館 地下ホール
申込先 公民館 ☎(572)5141

*次回は 11月11日(木)
向田邦子『思い出ランプ』(新潮文庫)です。

も、身近に感じられました。学校時代の不勉強さが悔やまれますが、和歌をもっと知りたくなりました。
浅田さんのご著書を書店に発注中です。いただいた資料の中に「こんな時に歌が使えるのかと驚くような実例がたくさん出てくる」とありました。是非又驚くような和歌を教えて頂きたいと思えます。

新着図書から

〈哲学 心理学 宗教〉	哲学者への質問 イアン・オラソフ(サンマーク出版)	104	〈自然科学〉	彼らはどこにいるのか キース・クーパー(河出書房新社)	440
	大人になっても思春期な女子たち 大須賀直子(青春出版社)	146		うちのやさしいかいじゅうごはんレシピ	
〈歴史〉	災害とたたかう大名たち 藤田達生(KADOKAWA)	210		あまこようこ(東洋館出版社)	493
	女武者の日本史 長尾剛(朝日新聞出版)	281		認知症を正しく知って、予防しよう! 神戸大学認知症	493
	悲劇の世界遺産 井出明(文藝春秋)	290		予防推進センター(神戸新聞総合出版センター)	493
	東京パンデミック 山岸剛(早稲田大学出版部)	291	〈工業〉	みんな水の中	
〈社会科学〉	韓国 延恩株(論創社)	302		まち歩きが楽しくなる水路上観察入門	
	多数決は民主主義のルールか? 斉藤文男(花伝社)	311		原発亡国論	
	ヨーロッパ・デモクラシーの論点 伊藤武編(ナカニシヤ出版)	312		木村俊雄(駒草出版株式会社ダンク出版事業部)	543
	共感が未来をつくる 野中郁次郎編著(千倉書房)	335		料理に対する「ねばならない」を捨てたら、	
	多様性との対話 岩渕功一編著(青弓社)	361		うつの自分を受け入れられた。 阿古真理(幻冬舎)	596
	マイノリティ問題から考える社会学・入門 西原和久編(有斐閣)	361	〈産業〉	食卓を変えた植物学者 ダニエル・ストーン(築地書館)	616
	新型格差社会 山田昌弘(朝日新聞出版)	361		桜の文化誌 コンスタンス・L・カーカー(原書房)	627
	貧困・介護・育児の政治 宮本太郎(朝日新聞出版)	364	〈芸術〉	イギリスの美、日本の美 河村錠一郎(東信堂)	723
	フェミニストってわけじゃないけど、どこか感じる違和感について			ドキュメンタリー撮影問答 辻智彦(玄光社)	778
	多様な社会はなぜ難しいか			世界の「こんにちは」	
	水無田気流(日経B P日本経済新聞出版本部)	367		東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所監修	
	コロナ禍、貧困の記録 雨宮処凛(かもがわ出版)	368		(日経ナショナルリジオグラフィック社)	802
	教員のメンタルヘルス 大石智(大修館書店)	374		産学連携でつくる多文化共生 三代純平編(くろしお出版)	810
	美しい和菓子の図鑑 青木直己監修(二見書房)	383	〈文学〉		
	ともに食べるといふこと 福田育弘(教育評論社)	383		百合中毒	
	日本災い伝承譚 大島廣志編(アーツアンドクラフツ)	388		最終飛行	
	人類学者は異文化をどう体験したか			臨床の砦	
				小説8050	
				リボルバー	
				平野啓一郎(文藝春秋) 91	ひ

〈一節〉

東郷隆著 『病と妖怪』

—予言獣アマビエの正体—



長い髪、鱗のついた胴。三本の足。目は菱形でくちばしを持ち、波間に浮いているところは、人魚と水鳥が合体したようにも見える。

令和二年春、SNSによって広まったこの姿は、いったいどこから来たものなのだろうか。実は原典がはっきりしている。

「肥後国海中の怪」と題され、弘化三年(一八四六)四月の年号と月が入った半紙一枚ほどの瓦版に描かれた凶像(十頁参照)だ。京都帝国大学図書館の朱印と、同新聞文庫の整理ラベルの付いたこれには、別に昭和十七年五月三十日の収蔵印が入っている。文面はなかなか達筆だが、それに引き替え添えられたアマビエの形はまるで子供が描いたかのように稚拙だ。波の形は烟の畝(うね)に似て、アマビエ本体も、波間から浮かび上がるというより空中にぶら下がっている感じである。

しかし、このヘタウマさ加減が逆に現代人の心の琴線に触れたのだろう。ともかく愛嬌のある姿なのだ。添えられた文章の現代語訳は十三頁を参照してほしい。文末の年号は弘化三年だが、この年から六ヶ年のうちに流行病があるという予言は当たったのだろうか。確かに弘化三年にも天然痘が流行している。ただし、この瓦版に記された年号というのは、実はあまり信用ならないのだ。病が流行しているからこそ、その年号を記して売ってやろうという瓦版売りの商魂の表れとも考えられる。

(集英社インターナショナル)



新型コロナウイルス感染症を考える

公民館では、私たちの生活に多大なる影響を及ぼしている新型コロナウイルス感染症について考える講座を開催しています。開催した講座とともに、講座の参考となるような図書を紹介します。講座の詳細は公民館だよりをご覧ください。今後も関連講座を開催する予定です。

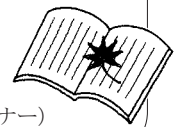


講座参考図書

- * 新型コロナ超入門 ー 一次波を乗り切る正しい知識
水谷哲也 (東京化学同人)
- * コロナ貧困 ー 絶望的格差社会の襲来
藤田孝典 (毎日新聞出版)
- * 闇の日本美術
山本聡美 (筑摩書房)
- * 縁食論 ー 孤食と共食のあいだ
藤原辰史 (ミシマ社)
- * コロナの時代の僕ら
パオロ・ジョルダーノ (早川書房)
- * コロナ後の世界を生きる ー 私たちの提言
村上陽一郎編 (岩波書店)
- * 感染症の世界史
石弘之 (KADOKAWA)
- * 手の倫理
伊藤亜紗 (講談社)
- * 文豪たちのスペイン風邪
(皓星社)
- * アンダーコロナの移民たち ー 日本社会の脆弱性があらわれた場所
鈴木江理子編著 (明石書店)
- * コロナ禍日記
植本一子ほか著 (タバックス)
- * コロナ黙示録
海堂尊 (宝島社)

関連講座について

1. 9月25日(土)
新型コロナウイルスを知る
～基礎知識を正しく理解して正しく備える～
講師 水谷 哲也 (東京農工大学農学部附属
感染症未来疫学研究センター)
2. 10月2日(土)
コロナ禍で気になる子どもの健康
～ステイホーム期間中も子どもの元気を保つには?～
講師 野井 真吾 (日本体育大学)
3. 10月8日(金)
コロナ禍の社会と経済
講師 太矢 香苗
(ファイナンシャルプランナー)



〈私の本棚から 第1回〉

中島京子著

『母国の帝国図書館』



中井 あつし

今月号から半年間、本項を担当させていただきます。

「私の本棚から」というコーナーなので、私の手持ちの本の中から愛読書を紹介したいと思います。

この本は、図書館予約十ヶ月待ちでようやく読めた本ですが、とても素晴らしい話だったので、もう一度じっくり読みたいと思って、その後書店で買いました。

数年前、初めて上野の国際子ども図書館に入った時、そのクラシックな外装と館内、階段室に驚嘆しました。

展示室に置いてあった模型を見て、元々は帝国図書館だったことを知り、豪華な理由に納得しました。

本書では擬人化された帝国図書館が、頻りに通ってくる二十歳の樋口一葉に恋したり、戦火を潜り、時には動物園での猛獣毒殺を間近に聞いたり、戦後は二十二歳のベアテ・シロタが新憲法の資料を探しに来たりする図書館を主題にする歴史小説と、その小説を書くために「わたし」が元戦争孤児の喜和子さんと知り合い、取材を進めていく話が並行して進んでいきます。

帝国図書館は福沢諭吉が不平等条約を撤

廃するため、日本の近代化には「ビブリアテキー」(古今の書籍を集めた文庫)が不可欠と設立されましたが、その後西南戦争、日清日露戦争、太平洋戦争と戦争のたびに図書館予算が削られ、戦費に回されてしまい金欠の歴史でした。その間にも、図書館や美術館が立ち並ぶ上野公園やその周辺の地は何度も大震災や戦火に焼かれ、無残な血が流されてきました。

果たして「ペン」は剣よりも強かったのでしょうか? そんな思いに駆られながら読みました。

ライターの「わたし」の前に現れた戦中生まれの子と喜和子さんという不思議な魅力を持つ女性。彼女の謎に包まれた子ども時代を探っていくミステリー要素がもう一つのストーリーです。上野駅周辺の壊滅的な焼け跡の上にできたバラック街で喜和子さんを匿ってきた人たちがいたことを書くことで、戦後の困難な中で貧しいながらも逞しく生き延びてきた上野の街と公園、そして帝国図書館(戦後は国立国会図書館)がとても印象に残りました。

著者はこの本を書くために、入念なロケハンをしたようで、上野、谷根千のお店や地形についてかなり詳細に書かれています。この本を持って「わたし」と喜和子さんが歩いたコースを辿ったことがあります。が、おいしいものも沢山食べられて、とても楽しい散歩になりました。(文藝春秋)